「うっかりしている時」から教わった幼児教育の魅力

杉原　徹

幼児教育と私

大学院で教育哲学を専攻していた私が、ご縁あって保育者を養成する短期大学に勤務するようになって、はや四年目になります。いまでこそ養成校での生活に慣れたといえますが、当初は驚くことばかりでした。

教育上のことでは、何といってもカリキュラムの過密さです。一年生などはほとんど五時間授業です。90分×5がほぼ毎日ですから学生はへとへとです。そして学外実習の多さ。二年生は六月に幼稚園（四週間）、八～九月に施設（十日間）、十一月に保育所（二週間）で実習をします。実習から帰ってきたかと思えば、また実習に出かけるような印象です。[注1]

研究上のことでも驚きがありました。幼児教育分野では、実践研究が圧倒的多数を占めているのです。[注2]私が専攻してきた教育哲学の研究スタイルといえば文献講読が基本ですから、幼稚園や保育所に出かけて幼児を観察・記録したり、保育者からアンケートをとったりというスタイルが主流であることに当初

戸惑ったものです。

ところで、幼児教育の世界に入ったことによる私にとっての最大の収穫といえば、幼児と直接ふれあう機会が多くなったということかもしれません。附属幼稚園に学生を連れて出かけることがありますが、学生以上に私が子どもたちとのかかわりを楽しんでいるような気がします。学生を放っておいて、私が遊びに夢中になっていることがしばしばです。

子どもたちとのかかわりを楽しみながら、一方で幼児教育の難しさを感じます。言葉の獲得途上にある幼児をどのように指導していくのか。学生たちにはたびたび次のように問いかけます。

「小中高大よりも、幼稚園や保育所の先生のほうが大変なんじゃないかな。だって、小学校からは教科書があって、言葉を使ったコミュニケーションでいいけれど、みんなは漠然とした5領域しか手掛かりがないし、言葉による問いかけだけではなく、五感を働かせて身体をしっかり使って指導していかなくちゃいけないし。幼児教育が一番難しいよねえ?」

私なりにハッパを掛けたつもりですが、学生は、きょとんとしています。こんな調子で、幼児教育の世界で日々奮闘中の私です。

K君の「うっかり」

倉橋惣三の「うっかりしている時」を、ある学生と一緒に読みました。何かアイデアが欲しい時に、学生の力を借りると思わぬ収穫が得られるということは養成校の勤務で学んだ教訓です。実際、今回も大きな収穫が得られました。

日ごろからよく話をしている男子学生K君を研究室に呼び、手始めにK君に実習中の「うっかり」体験を尋ねてみました。すると、彼は子どもの名前の呼び間違いについて話してくれました。

「一週間の幼稚園観察実習の最終日での出来事です。クラスの子の名前をまだうろ覚えで、ある女の子の名前を呼び間違えてしまいました。クラス全員

がそろっている場だったこともあるのか、えらく機嫌を損ねてしまいました。後味悪い実習でした」

K君は「うっかり」をマイナスのものとして認識しているようです。確かに、一般的に「うっかり」とは、マイナスをイメージさせるでしょう。では、倉橋における「うっかり」はどうでしょうか。

その人の味はうっかりしている時に出る。
うっかりしている時に出る味でなくては、真にその人のもち味とはいえない。
……我々のうっかりしている時が、如何に教育的に大切なはたらきをなしているかは考えらるる以上であろう。

ここでK君に、「うっかりしている時」のコピーを渡し、倉橋のこうした文章に触れてもらいました。K君はきょとんとしています。彼には思いもよらぬ「うっかり」理解がそこにはあったようです。私は問いかけました。倉橋がここで述べているような「うっかり」体験はないだろうか、「教育的に大切なはたらき」としての「うっかり」で思い当たることはないか。K君は「うーん」としばし悩んだ結果、少し時間をくださいと研究室を出ていきました。

K君のもう一つの「うっかり」

翌日、K君がやってきて「こんなエピソードはどうでしょうか」と次のような話をしてくれました。

「四週間の教育実習で設定保育をやったのですが、その時にこんなことがあったんです。僕が事前にいろいろな野菜、果物の絵を描いておいて、それらを子どもたちに見せながら名前を答えてもらいます。そして最終的に自分の好きな野菜、果物の絵を自分たちで描いてもらおうという活動案を立てていました。準備をしっかりし、活動を始めました。このクラスにも慣れてきていたし、正直言って自信がありました。実際、当初は計画どおり進んでいたんです。

ところが、トウモロコシのところで……。子どもたちは正しく答えてくれたんですが、僕はつい『そうだね、トウモロコシ、だね』と言っちゃったんです。そうしたら、子どもたちは大爆笑。次からは、すべてわざと言い間違えるんです。タマネギ、なら『タネマギ』とか。絵を描く時も、パイナップルの絵の横にわざわざ『パナップルイ』と書く子までいて。でたらめ言葉を楽しむ活動になったような……。でも、僕の言い間違えが波紋を呼んで、活動が盛り上がったような気もするから、これは倉橋のいう『うっかり』ですか?」。

実におもしろいエピソードです。K君はでたらめ言葉を気にしているようですが、本来の名前を正確に覚えているからこそ可能になるわけだし、「パナップルイ」と書いた子が本当にそのように記憶していくわけではないでしょう。活動を盛り上げるきっかけをつくったK君の言い間違いは、倉橋の文脈における「うっかり」の「教育的に大切なはたらき」を感じさせます。

K君に「おもしろいエピソードをありがとう」とお礼を言って別れましたが、彼が研究室を出て行った途端、あることが気になってきました。彼の設定保育を見ていたクラス担任の先生はどのように感じたのだろう。養成校の教員が「教育的に大切なはたらき」などといえるのは気楽さゆえのことであって、担任の立場からするとでたらめで楽しんでも……ということになってしまうものだろうか。そう考えると、何となく不安になってしまいました。

保育者のコメント

さらに翌日、K君にもう一度来てもらって聞きました。「昨日の話だけど、反省会で先生にどう言われた?」K君は、にやりとして話してくれました。「それがですね……僕が言い間違いをして、でたらめ言葉が飛び交うようになった時、僕はかなり慌ててしまったのですが、ふと先生を見るとニコニコし

ていたんです。ちょっと不気味で、反省会で何を言われるかなあ、とドキドキしていました。反省会の時間がきて、先生がいつものように『今日はどうでしたか?』と聞いてきたので、『今日の設定保育はよかったのか悪かったのか、複雑な気分です』と答えました。そうしたらその先生、何て言ったと思います?『あれでいいのよ。子どもたちすごく楽しんでたでしょ』と。緊張が一気にほぐれましたよ」。

K君の話を聞いて、不安が解消されほっとしたのはいうまでもありませんが、私にとって興味深かったのは、続きのコメントです。K君によれば、クラス担任の先生は次のように言ったそうです。

「K先生が言い間違えた時、どんな顔してたか覚えてる? 顔をゆがめて「やっちゃった」という表情だったよ。子どもたちはそこもおもしろかったのよ。私も笑っちゃった。K先生はうっかり言い間違えたことで指導案上の計画からそれてしまったのを後悔しているかもしれないけれど、そういうことはあるわよ。私、保育者になって二十年以上経つけれど、そういうことはしょっちゅう。しょっちゅうじゃいけないかもしれないんだけど……。でも、信じられない言い間違いみたいなうっかりなんて、いつ起こるかわかんないしね。防ごうと思っても防げないなら、うっかりを防ごうとは意識せず、その時はその時って割り切って、とにかく楽しんで保育していようと思ってるの」。

実習生K君への語りからにじみ出る「うっかり」への思い。「その人のもち味」として、「教育的に大切なはたらき」として、「うっかり」について述べる倉橋の保育観と重なり合い、思わずK君にこう声をかけてしまいました。

「K君、いい先生に指導してもらったね。その先生、倉橋そのものだよ！」。

私に残された課題

「うっかり」による「教育的に大切なはたらき」なんて、狙うものではありません。狙った瞬間「うっかり」ではなくなります。「ねらい」「内容」という枠組みに基づく指導計画には決して表れませんが、そうした計画不可能性ゆえの「教育的に大切なはたらき」というものがあるのかもしれません。倉橋、K君、K君の指導者の保育者に導かれて幼児教育の魅力にまた一つ触れることができた思いです。しかし、私には大きな課題が残されています。この魅力を理論的に説明することです。幼児教育における「うっかり」について、もうしばらく考え続けてみたいと思います。[注3]

（高知学園短期大学講師）

注（参考文献）

1 杉原徹「本学幼児保育学科における実習指導の課題―学生のコメントを手がかりとして」『高知学園短期大学紀要』第40号　二〇一〇年　p.45-55
杉原徹・小島一久「保育者養成校と附属幼稚園との連携のあり方に関する研究―教育実習事前指導重点化のための試みを通して」同前 p.57-68
2 無藤隆「保育学研究の現状と展望」日本教育学会編『教育学研究』第70巻第3号　二〇〇三年　p.103-110
3 矢野智司『意味が躍動する生とは何か』世織書房　二〇〇六年